

Newsletter

No. 27

秋田英語英文学会

Akita Association of English Studies



AAES Newsletter No. 27

発行代表者: 佐々木 雅子

2025 年 (令和 7 年) 6 月 9 日発行

発行所: 秋田英語英文学会(AAES)事務局 〒010-8502 秋田県秋田市手形学園町 1-1 秋田大学教育文化学部

70th Anniversary of the AAES

Seventy years have passed since its foundation in 1954. The 2024 annual conference featured how English language education will/should be developed in a radical transformation of learning driven by digital technology and globalization. The conference theme 「学びの変革期」における英語教育: 小中高大と教員養成 was discussed through the keynote speech by Professor Yoshinori Watanabe and the following symposium with four presentations from each level of education.

Opening ceremony speech was made by the chair of the AAES, Masako Sasaki, with appreciation of the hard work by the foundation members led by Emeritus Professor Junji Miura and hope for its further development as follows:



Masako Sasaki (Chair of the AAES)

Today, we gather to celebrate the 70 anniversary of the Akita Association of English Studies and to mark the start of our society's journey that is going to keep on with our continued academic curiosity and sincere efforts.

Let us imagine how this academic society was initiated. According to Emeritus Professor Junji Miura, a small group of university students established it to make English education better. We should not forget their pioneer spirit.

And let us keep in mind that this academic society has developed for the past as many as 70 years while emphasizing the interconnection of English linguistics, British and American literature, and English education including intercultural communication and understanding.

This interconnection is to be expanded further backed up by technology advancement, although our human exploration, inspiration, and cooperation are the most crucial element for enriching this Akita Association of English Studies.

Again, today we are here to mark the new start

of the Akita Association of English Studies, which means, at the same time, the new start of each of us in each own specialized field. Let us open the gate to new English education together at this conference by learning from the keynote speech by Professor Yoshinori Watanabe at Sophia University and also by discussing at the following symposium, where dedicated teachers and students express their opinions based on their teaching and learning experiences.

Keynote Speech

- ◆ Initially, the vice chair, Yoichi Onishi, introduced the keynote speaker, Professor Watanabe, who has as honorable research and teaching career at universities, including Akita University.



Yoichi Onishi (Vice Chair of the AAES)

- ◆ Professor Watanabe's keynote speech was full of insights and information to make us reflect on the past and explore the future of English Education in Japan. The following PPT slide excerpts tell you what he explicated. After the speech, he answered questions from the floor about how we analyze students' progress in learning and how AI should be utilized in school and university English education.

学習評価と入学考査にみる英語教育の不易流行

The Unchanging and Evolving Principles of English Education Observed in Nationwide and Admission English Examinations

- Watanabe, Y. (2019). Learning to be assessment-literate – Critically analysing the results of the 2019 nationwide English examination. British Council New Directions at Yokohama Pacifico.
- 渡部良典、(2021) . 1月16日実施第1回大学入学共通テスト『英語リーディング』、および『英語リスニング』の講評。大学入試のあり方に関する検討会議2月11日配布資料。



Professor Yoshinori Watanabe (Sophia University)

全国学力テストで初の英語「話す」**正答率3割どまり**

「話すこと」調査実施生徒数の1.6%、学校数の17.5%に生徒の**音声データ欠損等**があった。

英語「書く・話す」の正答率は**5割未満**に 全国学力調査

「話す」では2人の会話を聞き、即興で質問する問題の**正答率が10.5%と低かった**。

「書く」では学校を示すピクトグラムを見て、どちらが良いか25語以上で自分の考えを書く問題の**正答率は1.9%だった**。

英語で伝える力の**弱さ**が見て取れる

文部科学省は「主体的、対話的な学び」を推奨しているが、英語に関しては、**まだ成果が出ていない**と言わざるを得ない。

グローバル社会で活躍できる人材の育成は道半ばだ。

まとめ

- 生徒は書くことよりも話すことの方が得意である
 - 聞いて書いて応答する課題では、8.4%の生徒が正答、31.3%が誤答
 - 読んで書いて応答する課題では、7.4%が正答、27.3%が無回答
 - 準備時間が与えられれば一貫性のある発話ができる
 - 一貫性のある文章を書かせる課題では、1.9%が正答、8.1%が無回答
 - 即興で口頭で質問させる課題では10.5%正答
 - 自分自身について（例えば、自分の将来の夢など）がテーマであれば話すことができる（45.8%の正答率）
 - 読んだり聞いたりして理解した内容を基に自分の意見をまとめることが不得意である（正答率は1.9%、誤答が31.3%）
- 内容を理解し、その内容をまとめ、発表する練習が必要

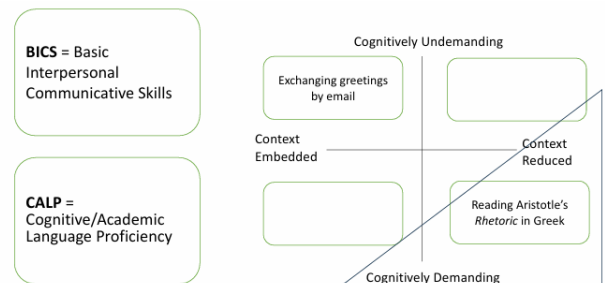
*

構造を重視した言語観から機能言語学的言語観へ

- 語彙、文法、文章構造等言語の構造を問う問題は消え、ほぼすべてが言語を使って何ができるかを重視する言語観に完全にシフト
- 周知の通り、従来のCEFRはA1は〇〇ができる、B1は△△ができるといったいわゆるcan-do statementを言語能力の指標としている
- 共通テストがCEFRを枠組みとしているわけではないが、学習指導要領はCEFRの機能言語学的側面に影響を強く受けていることは明らかであり、共通テストが学習指導要領の内容を強く反映することは明らかである以上、CEFRと共通テストの間に関連性が認められることは極めて自然なことである。

高度な言語運用能力よりも基本的な言語運用能力の重視

- 新学習指導要領
 - 「知識および技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」の中
 - 「思考・判断」の測定が脆弱では
 - 共通テストの英文の構造や語彙、トピックがBICSに重点を置いているように思われる
 - 高度な認知能力を必要とするCALP（Cognitive Academic Language Proficiency）が少ないように見受けられる
 - 学校教育における英語力の測定が目的である以上、後者にもより多くの重点をおかれるよう検討が必要では



(Cummins, 1979)

明示的言語習得観から暗示的言語習得観へ

- 明示的指導（explicit instructions）は特定の語彙、文法、文章構造などに焦点をおいた指導法を指し示し、暗示的指導（implicit instructions）は学習者の理解できる言語を提供し、意味内容の理解と伝達に重点を置いた指導法を指し示す
- 明示的な指導法は言語の構造に対する学習者の意識を重視した指導法、暗示的な指導法は無意識を重視した指導法
- 共通テストで発音、語彙、文法問題が廃止されたのは、暗示的指導の効果を前提とされているのであろう
- 第二言語習得研究においては多くの研究が現在示すところでは、言語運用能力向上のために、構造を意識させない意味重視の暗示的な指導が、意識を重視する構造重視の明示的な指導よりも効果があるという証拠はない



Q&A



Symposium「学びの変革」期における英語教育 小中高大と教員養成

◆Pre-symposium Discussion

Prior to the symposium, two preparation meetings were held via Zoom on November 1st and 8th, 2024, by the following teachers:

【小学校】山崎麻絵(秋田大学教育文化学部附属小学校教諭)、小松千夏(牛島小学校教諭)、柿崎健太郎(雄和小学校)

【中学校】佐々木琴音(男鹿東中学校教諭)、伊藤景子(秋田大学教職大学院准教授)、近藤聖眞(秋田大学教職大学院生)

【高校】戸崎彩佳(六郷高等学校教諭)、佐藤愛海(秋田大学教職大学院生)

【大学】若有保彦(秋田大学准教授)、パターン・エイドリアン(秋田大学准教授)、佐々木雅子(秋田大学教授)

Summary of the discussion:

小学校

Teaching については下記の3点。

1. 系統性(指導内容)
 - ・単元の中の系統性を限定(見通し)
8時間 最初でゴール設定
➡児童の自己選択しながらゴールに向かう
 - ・「単元をまとまりにした学び」は思考・表現・判断力に結び付き、定着は意欲によって増強され進むのではないか。
 - ・外国語活動(3, 4年)での定着は難しい。
2. ALTとのTT:活動と身につけさせたい知識・技能 ➡ALTの力を借りながら表現できるようにしていく。
3. 定着させる音の難しさ。特に外国語活動(3, 4年)での定着は難しい。

Testing について下記の2点。

1. 全国学テや入試との Link をどう意識するか
高校大学を意識するのは難しいが、小中連携(授業を見合う等)の機会は確保されている
2. 5,6年生の評価
 - ・現在は、ペーパーテスト、パフォーマンステスト(やりとり、スピーキングテスト、発表)、ライティング(写し書き)
 - ・形成的評価(子どものみとり、振り返りによる自己評価、単元の最後にアンケート的評価)。
 - ・即時的評価(見とりの評価)1~4年においては記録として残すのは厳しいが、活動をその場で評価をすることが結構多い=困難点はALTとの共有。事前打ち合わせは

授業前の数分間なので、授業内で共有することがある。

中学校

Teaching について

1. 「書く」ことについて課題
 - ・小学校では読む・書くは、聞く・話すほど求めている。
 - ・中1:自力で書く、2, 3年生への系統性を高める必要性
 - ・小学校はどのようにあればよいのか【小中連携】。
2. 「読む」ことについて
教科書の内容はできるが、全国学テのメール文、情報整理などができない。教科書から離れ、実際の場面になると、応用力や即興力の弱さが出る。
3. 「話す」ことについて 即興性が弱い
4. 思考・判断・表現力
実際の場면을想像して言語活動を行うことが大事。内容面をいかに膨らませていくかが大事。どんなことを相手に合わせて伝えればいいのかを、Sから/Tからの Feedback。「積み重ねていく」ことによってよりよいものにしていく。形成的評価を生かす。パフォーマンステストや定期テストを加える。
5. 即興性
トピックによって生徒は異なる反応を示すので、トピックの選定が重要。モデルでの例提示が一つの手立て。適切性、正確性を見とるのは難しい。指導ポイントは、話を広げるポイントは、相手の質問に合わせて広げていく。
6. 一人でできる応用力をつけるには
言語活動を複数の単元で活用する。たとえば、warn-upで活用したり、負荷をかけていく(2回目は見ないで書くとか)。ひとりでできる時間を確保する。教え合ってやる気を確保しながら、ひとりでの取り組みも確保する。

高校

1. 学力差が大きい
2. 基礎学力が乏しい状況で、即興性のあるディベートやスピーチの即興性を養うには?
➡どのような英語を身につけさせていくか
3. 英語が必修科目であることの必然性を感じさせるには?
4. 大学入学共通テストで測定している力を身につけさせる授業をして、支援していく必要がある。一方で、基礎学力があるかどうかは

さておいてのテストになっているのでは？
大学について

- TOEIC400 点が進級要件となっている
- TOEIC は聞く・読むだけ

シンポの観点

下記の3観点に基づいて、今後の英語教育の方向性とあるべき姿を明確にしてい

1. 思考力・判断力・表現力
2. 即興性
3. 応用力:授業を通して、「ひとりでできる」ようにするためには？

◆Symposium

Based on the pre discussions, the theme was discussed by the presenters. Here, the photos of the presenters will tell you the atmosphere of the symposium. More detailed contents are available in Akita English Studies (Akita eigo eibungaku) No.66. https://air.repo.nii.ac.jp/search?page=1&size=100&sort=-createdate&search_type=2&q=1748219458661

<大会報告>

- ・『今後の小学校外国語教育の方向性とあるべき姿』by 山崎 麻絵・柿崎 健太郎・小松 千夏
- ・『秋田県における中学校英語科の授業づくりに関する一考察』by 伊藤 景子・佐々木 琴音・近藤 聖眞.....
- ・『大学入学共通テストと高校での教育実践』by 大須賀 弥生・戸崎 彩佳.....
- ・“English at University: an overview and some thoughts on the issues of teaching English writing and pronunciation” by Adrian Paterson



Yasushiko Wakaari (Coordinator of the symposium) & Presenters



Elementary School



Asae Yamazaki



Kentaro Kakizaki

Junior High School

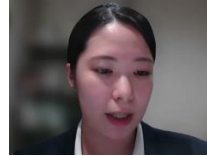


Keiko Ito



Kotone Sasaki

Senior High School



Ayaka Tozaki

University



Adrian Paterson

Closing Ceremony

秋田英語英文学会の成立・・閉会の言葉として
大西 洋一

以下の文章は、昨年 11 月 24 日に開催された「秋田英語英文学会 70 周年記念大会 2024」の閉会の言葉として話した内容の一部を文章として再構成したものである。

主眼は、この学会がどのように生まれてきたのかを知らない世代の会員の皆様に、本学会成立当時の様子と学会成立にかけた思いを知ってもらふことであつた。なお、当時を振り返る資料として主に用いたのは、秋田英語英文学会会長も務められ、長らく秋田県の英語教育界を先導してこられた秋田大学名誉教授の三浦順治先生が退官時にまとめられた『秋田英語英文学会 43 年の軌跡』(1997 年)という小冊子である。

今回この挨拶文を Newsletter 用にまとめていると、もうすでに記憶から消えていたのであるが、今から 20 年前の 2005 年 4 月 1 日に発行された本学会の Newsletter 第1号にも三浦順治先生が「Message from the founding father 秋田英語英文学会発足のころ」という小文を書かれていることがわかった。当時の秋田大学の「英語科」の様子と学会成立時の事情に興味を持たれた方は、上に挙げた冊子とあわせてぜひそちらもお読みいただきたい。

＊

秋田英語英文学会は、本年をもってめでたく 70 周年を迎えることになりましたが、会員も移り変わり、今や学会成立当時のことを知る人も本当に少なくなりました。そのため、本来ならばここで秋田英語英文学会の歴史全体を確認したいところですが、時間と私の知識に限りがありますので、秋田英語英文学会成立時の様子を少し振り返ってみたいと思います。

まずその前に、秋田英語英文学会が共に歩んできた、現在の秋田大学教育文化学部がどのような変遷を辿ってきたのかを簡単におさらいします。

◎ 昭和 24(1949)年

秋田師範学校と秋田青年師範学校を統合し、国立秋田大学学芸学部開設(5月)。一部(四年課程)と二部(2年課程)のそれぞれに甲類(中学校教員養成課程)乙類(小学校教員養成課程)を置く。学芸部(人文科学科、社会科学科、自然科学科)は保戸野に、教育部(教育学科、職業学科、芸能学科、体育学科)は中通に、農場は四ツ小屋に置かれる。

◎ 昭和 42(1967)年

国立秋田大学教育学部と改称(6月)。
学芸専攻科を教育専攻科に改称。

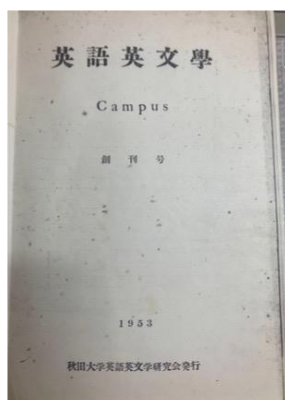
◎ 平成 10(1998)年

教育学部を教育文化学部に改組・改称(4月)。
学校教育課程と地域科学課程、国際言語文化課程、人間環境課程で構成。

◎ 平成 26(2014)年

教育文化学部改組(4月)。学校教育課程と地域文化学科で構成。
(秋田大学教育文化学部ホームページ内「沿革」から抜粋(<https://www.akita-u.ac.jp/eduhuman/guide/>))

秋田英語英文学会は、秋田大学学芸学部の英語科を母体として生まれましたが、まずはその「前史」として「秋田英語英文学研究會」の存在があります。この会は英語科の学生による研究会であり、昭和 28 年(1953 年)3 月 5 日には『英語英文学 Campus』創刊号を発行しています。これは、主に英語科第 1 期生の卒論報告を内容としており、『秋田英語英文学会 43 年の軌跡』をお書きになった三浦順治先生は、恐らく「秋田県で発行された英語関係の研究誌の第 1 号」であろうと振り返っておられます(『軌跡』p.4)。



『英語英文学 Campus』創刊号表紙(1953 年)

もちろん、英語・英文学を専門とする当時の英語科の教官たちの方でも、この英語科の学生たちの研究への熱意と呼応するように、学内の会にとどまらない研究団体の設立を考えていました。昭和 29 年(1954 年)2 月 27 日(土)には、「保戸野学芸学部英語教官研究室にて、一般有志、卒業生、学生代表による秋田英語英文学会設立に関する会合」が開かれ、ここに晴れて秋田英語英文学会が発足することになりました(『軌跡』p.6)。

秋田英語英文学会の結成を記念する事業として、この年の秋には(10 月 9 日(土)・10 日(日))、第 9 回東北英文学会を秋田に迎えて開催しています。発表者のリストには、秋田県内の大学・短大・高校・中学に勤める秋田英語英文学会の会員が並び立ち、英文学・英語教育・英語学に関して研究発表を行っており、学会発足当時の意気盛んな様子が伺えます(『軌跡』p.8)。

秋田英語英文学会独自の年次大会としては、翌年の昭和 30 年(1955 年)10 月 9 日(日)に秋田大学学芸学部中講堂で第 1 回学会大会が開催されました。そして、さらにその翌年の昭和 31 年(1956 年)12 月 15 日には、『秋田英語英文学』の第 1 号が学会発足後二年を経て「秋田英語英文学会機関紙」(全 8 頁)として発行されて、今に続いています。(なお、設立当初から平成 9 年(1997 年)までの全年次大会のプログラムと学会誌の全目次が『秋田英語英文学会 43 年の軌跡』に掲載されていますので、興味をお持ちの方は是非ご参照ください。)

ここで少し長くなりますが、初代会長の宮城健二氏(鉱山学部)を継いで秋田英語英文学会二代目会長となった岡田茂氏(学芸学部)による『秋田英語英文学』創刊号の冒頭に掲げられた「発刊の挨拶」をご紹介します、当時の学会の活動に寄せた思いを確認したいと思います。

我々が秋田英語英文学会を組織して以来三ケ年間の宿願が叶えられ、ささやかなものではあるがここに機関紙第一号を刊行する運びとなり洵に喜びに堪えない。何事によらず始めることも難しいが、これを継続することは更に困難である。ローマは一日にして出来たものではない。我々も今後第二、第三と版を重ねて行くには幾多の難事が伴うものと予想される。然し幸にして我が秋大英語科には最近新進気鋭の教官が二、三加えられ陣容も一応調い、また内容的にも一段と強化されて来た。この若手教官の努力と卒業生諸氏の協力によ

って前途の難関を突破し、所期の目的を達成しうるものと確信する。

我が秋田大学が新制大学として発足して以来約百名近くの英語科卒業生を世に送り出した。この大部分が県下の中学校或は高等学校に勤務しているが、その日その日の雑務に追われ、不本意ながら自分の研究が疎かになると言って居る。卒業の当時は更に深く研鑑を積み、一生を通して何か完成して見たいと誰しも一様に希うものである。然し現実はいかにこれを許さない。そればかりか Jack and Betty のような簡単な教材をあつかうには深い研究も必要としない。寧ろ高度の研究が邪魔になる場合もある。こうした環境の中に幾年か同じ事を繰り返している間に、何時の間にか卒業当時の高邁な精神も遠大な希望も消え去ってしまうのも又極めて自然であろうと思われる。

勿論教育者としての必要条件は学識を高め実力を養成すること許りでなく、優れた技術、旺盛な指導力、人間としての深い教養、その他多くの条件が必要であろう。然し内容の伴わない単なる技術、教養という裏付けのない指導力にはどこか空虚なものがあり、生徒の心に対する感化力とはなり得ない。学問と教養は無言の感化力であり、教師に課された義務であり、又終生の課題であると思う…＜中略＞…我々の英語英文学会は月例研究発表会の他に、秋には総会を兼ねた特別の研究会を開くことにしている。こうした機会を利用して諸氏の日頃の研究成果を発表して欲しい。又この小冊子が諸氏の研さんの指針としての一役を果すことが出来るなら幸甚の至りである。



『秋田英語英文学』創刊号表紙(1956年)

学会を継続することの困難を感じながらも会員らの協力があれば乗り越えられると確信し、そして県内の教育現場で働く卒業生会員たちの現状に思いを馳せ、秋田英語英文学会を彼らが「学問と教養」を積む研鑽の場にしてほしいという願いが伝わる文章です。もちろん、文中の「学問と教養」という言葉が意味するものには時代的制約がありますが、会員の皆様には自分たちが今思う「学問と教養」をこの学会の活動を通じて学んでいただければと思います。

最後になりますが、同じく『秋田英語英文学』創刊号の「編集後記」の言葉で締めくくりたいと思います。

ここに「秋田英文学」第1号が陽の目を見たことは、まことに喜ばしい。ささやかではあるが、これで心の絆ができたことになる。会員各位の積極的な協力を得て、大事に守り育てて行きたいものである。…＜中略＞…会費の納入はぜひお忘れなく願いたいものである。折角生まれた赤子を早死にさせることのないように。

「折角生まれた赤子」は早死にするどころか、古希70歳を迎えることになりました。とはいえ、人生100年時代と言われる今、「会員各位の積極的な協力」のもとで、さらに長寿を目指して秋田英語英文学会の活動を継続していきたいと思えます。

Essence in academia

AIを活用した英語教育の可能性について

畠山 研

2023年度までAIの研究に関わっていました。題目は「AIを援用したパフォーマンステスト半自動採点システムの開発」です(科研・基盤C、研究代表者は三重大の金子淳教授で、ちなみに金子先生は秋田県出身)。スタート時にはAIという言葉はまだあまり認知されていませんでした。それが今では目覚ましい進歩を遂げており、本研究終了から数年経った現在、以下が最新の状況というわけではありませんが、紙面の許すかぎりでご紹介します。

ご存じのとおり、英語4技能のうち、「話すこと」の評価はパフォーマンステストで評価されます。現場の声を調査すると、多くの現場教員がパフォーマンステスト運用に問題意識を持ち、不安を感じていたことがわかりました。時間や人員の

確保、準備や練習などの大変さ、採点者の主観に左右され評価が揺れるのではないかと、採点の負担が重い点など。そうした状況を改善するため、本研究では AI を活用する仕組みを作ることを目指しました。

当時、コンピュータによる既出の自動採点は人間が採点した場合とスコアの一致率が 97% でした。その数字を 100 に近づけるのではなく、現実的な選択として、本研究は第一段階で AI に採点させ、第二段階で教員が自ら確認し修正を施す仕組みを考えました。これが「半自動採点システム」と呼ぶ所以です。ちょうど車の「自動運転」システムに例えることができます。完全運転ではなく運転支援によりドライバーの負担軽減を期待する、それと同様のことを目標としました。

研究の方法として、AI を用いて児童・生徒の発話をテキスト化し、そのデータから任意で複数の特徴量を抽出、それらに機械学習等で重みをつけて点数化、必要に応じて教員が部分的に修正を加えるというシステムを構築し、検証をスタートしました。当時は新型コロナウイルスの流行があり、学校現場との連携が困難になりました。そこで、研究代表者と分担者が所属する国立・私立大学の 3 年生・4 年生ならびに大学院生に、中学校で実施されることを想定したパフォーマンステスト（「自分の好きなものを伝え合おう」「自分の好きな人・尊敬する人を伝え合おう」）を実施し、動画として撮影し、代替のデータとしました。それらをテキスト化し、音声認識し、数値化しましたが、学校現場で使用されることを念頭に、発話内容の一貫性を示す数値だけでなく、個人の発話の前後のつながりやペアのやりとりの自然さの数値も算出する等し、正確な「採点」になるかを検証しました。

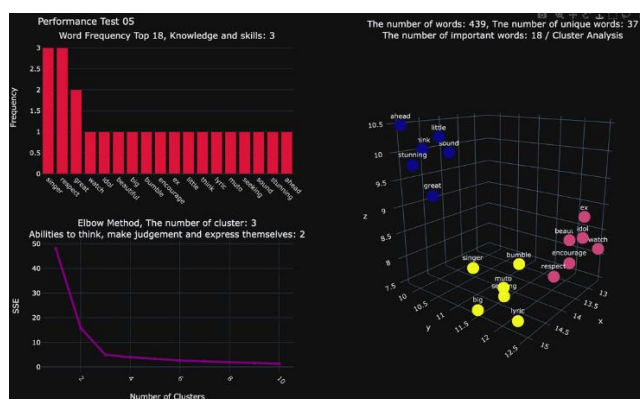


図. パフォーマンステストの結果をダッシュボード形式で点数化・可視化する作業の一例

検証結果は全体的に良好でした。当時の AI

は固有名詞の認識は困難で、個人によって認識の精度に差が生じることもありましたが、それでも一定の正確さを確認できました。半自動採点の結果とネイティブ・スピーカーによる実際の採点の結果を比較する作業も加え、大きな差がなかったことも確認しました。よって、半自動採点は、教員の負担を軽減し、今後の評価基準の客観性や公平性への不安を和らげるのに効果があるという本研究の有用性を示唆することができました。

また、検証中に細かいさまざまな課題も同時に洗い出されましたが、AI の進歩はめざましく、本研究時も今もよりよいツールが次々とリリースされ続けています。それら課題はすでに容易に解決可能であったり、明日突然解決されるものもあるかもしれません。AI の精度向上がとどまることを知らない今、適切にコントロールすること、それによる AI と人の「協働」が英語教育のために具体的になることを願うばかりです。現在の金子先生の最新の研究は生成 AI のさらなる活用で、近々また新たな成果が公開予定とのことです。

Conference in 2025

期 日: 研究大会 2025 年 6 月 29 日 (日)

主 催: 東北英語教育学会

共 催: 秋田英語英文学会

後 援: 秋田県教育委員会、秋田市教育委員会

会 場: 研究大会 秋田大学教育文化学部 3 号館

参 加 費: 500 円

(会員、非会員問わず。学生・大学院生は無料)

大会受付: 6 月 29 日 (日) 9:00 ~

秋田大学教育文化学部 3 号館 1F ピロティ

日 程

9:00 ~ 受付

9:30 ~ 9:45 開会式

9:50 ~ 11:30 研究発表

11:30 ~ 12:30 昼食・休憩

13:10 ~ 15:20 シンポジウム

15:20 ~ 15:30 閉会式

◆ 開会式 9:30 ~ 9:45

(会場: 教育文化学部 3 号館 145 室)

司 会: 秋田支部 伊藤 久 (五城目町立五城目小学校)

開会の辞: 秋田支部長・大会実行委員長
若有 保彦 (秋田大学)

挨拶:東北英語教育学会会長
久保田 佳克(東北福祉大学)

◆研究発表 9:50～11:30
(発表 20 分、質疑応答 10 分)

第一会場 教育文化学部 3 号館 145 室

司会 山崎 健一(秋田県立大学)
三野宮 春子(岩手大学)

1. 9:50～10:20

大学の教養教育二年次以上科目 Academic Writing and Presentation 一構成主義に接近する実践報告

Solomon Joshua Lee(弘前大学)

2. 10:25～10:55

語彙指導に関する教師信念の調査
及川 凱重(東北大学大学院国際文化研究科)

3. 11:00～11:30

学び合いの中で考えを広め、深めることができる生徒の育成
佐藤 富美男(男鹿市立男鹿東中学校)

第二会場 教育文化学部 3 号館 150 室

司会 菊池 秋夫(八戸工業高等専門学校)
鈴木 渉(宮城教育大学)

1. 9:50～10:20

日台中学生の類似性と異文化間能力から考える国際交流の可能性
若生 深雪(仙台高等専門学校名取キャンパス)

2. 10:25～10:55

やる気がある学習者は難しいお手本を読みたがる? —L2 ライティングにおけるモデル文難易度の選好と動機づけの関連—
大須賀 心綾(福島工業高等専門学校)

3. 11:00～11:30

「指導する」から「共につくる」小学校外国語教育に関する一考察 —効果的な CAN-DO リストの在り方を考える—
大江 朝美(山形市立東小学校)

◆昼食・休憩 11:30～12:30
(教育文化学部 3 号館 145・150 室)

◆シンポジウム 13:10～15:20
(教育文化学部 3 号館 145 室)

テーマ:中高連携の課題

司会: 大山 慎一(東北公益文科大学)
吉澤 孝幸(秋田大学)

提案者: 舘田 剛志(青森県立青森高等学校)
中野 真琴(盛岡市立見前南中学校)
大黒 知行(仙台市教育委員会教育指導課指導主事)

◆ 閉会式 15:20～15:30
(教育文化学部 3 号館 145 室)

司会:秋田支部事務局 伊藤 久(五城目町立五城目小学校)

次年度大会について:
東北英語教育学会会長 久保田 佳克(東北福祉大学)
青森支部長 丹藤 永也(青森公立大学)

閉会の辞:秋田支部長・大会実行委員長 若有保彦(秋田大学)

◆ 駐車場について:

秋田大学手形キャンパスの正門から入って左折先にある駐車場が無料で利用できます。

当日は駐車場西ゲートを常時開放します。正門から入ってすぐ左折し、まっすぐ進んだ先に駐車場西ゲートがありますので、ゲートを通して直接駐車場内へ入場・駐車願います(守衛への確認は不要です)。満車等の場合は インフォメーションセンター(総合案内)へお立寄りいただき守衛の指示に従って駐車して下さい。路上駐車や秋田大学以外の施設・敷地への無断駐車は絶対におやめ下さい。通行・駐車中の事故・盗難等の責任は一切負いかねますので十分お気をつけ下さい。お帰りの際、駐車場西ゲートが閉じている場合でも車両が近づくと自動で開きますのでゲート手前で一時停止をお願いします。

Editor's postscript

We're so glad to celebrate the 70th anniversary of the Akita Association of English Studies. This issue is for appreciating all the people who have contributed to this academic society.

Editorial board: Ken HATAKEYAMA, Adrian PATERSON, Masako SASAKI